紀貫之の和歌の表現と人麻呂の泣血哀慟歌をめぐって：紀貫之の作歌の一方法

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学国語国文学研究室 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水谷, 隆 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171225-159

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	紀貫之の和歌の表現と人麻呂の泣血哀慟歌をめぐって：紀貫之の作歌の一方法
Author	水谷, 隆
Citation	文学史研究. 30 巻, p.11-23.
Issue Date	1989-12
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

紀貫之の和歌の表現と人麻呂の泣血哀慟歌をめぐって

――紀貫之の作歌の一方法――

水谷　隆

Ⅰ

「貫之集」恋の部に次の歌が収められている。

かきくもり雨ふることもまだ知らぬ笠とり山にまどはる、かな

（貫之集[注1]　六三九）

この歌は、恋の部に収められていることから恋の歌であることが判る。しかし、この一首を「貫之集」から切離し、単独の歌として鑑賞する時、何によってこれを恋の歌と判断できるだろうか。

それは、第一には下句「笠とり山にまどはる、かな」によっているだろう。たとえば、

いかばかりこひてふやまのふかければいりといりぬるひとまどふらむ

（古今和歌六帖[注2]　四恋　一九八〇）

この歌では、恋にまどうことを、深い山中にまどうことでたとえている。また、時代は下るが、

たれとしらず、人とものたまふに、やりどをたてていりたまひぬれば

あぢきなやこひてふ山はしげくともひとのいるにやわがまどふべき

（一条摂政御集　九八）

この歌も、恋を山でたとえ、「まどふ」と言う側面を取り上げたものである。さらに、

たれをかはこひのやまべのほととぎすくさのまくらにたびたびはなく

（家持集　六五）

よしさらばむかしのあとをたづね見よ我のみまどふこひのやまかと

（狭衣物語[注3]　巻一）

のように、「恋の山」と言う言葉がしばしば和歌に用いられることから、十一世紀の初頭には、「恋の山」と言う言葉が、一つの歌語として成立していたものと思われる。遡って、貫之の時点でも、恋を「まどふ」と言う側面で捉え、「山」にたとえる表現方法は、かなり一般的であったのではないかと予想する。そう考えるならば、貫之の歌の「山にまどはる」という表現が自然と恋にまどう心の象徴たりえたことが了解される。逆に、そう考えなければ、この貫之の歌は恋の歌として成立しないだろう。

Ⅱ

では、この恋の山たるものが貫之の歌において「笠取山」であることの理由は何なのだろうか。

一つには、「笠取山」の「笠」と、二句の「雨」が、縁のある言葉としてひと続きに詠まれていることが指摘できよう。恋の歌において、「雨」が「涙」のたとえであるのは、和歌の常套的表現である。Ⅱの歌でも、「雨」は涙の雨と取らなければなるまい。さらに、その「雨」と縁のある、初句の「かきくもり」と言う言葉も、

……心うくもすきにけるひかすかなととほすに又かきくもりもの
みえぬ心ちし給へは……　（源氏物語[注4]　椎本）

この例のように、ある気象の状態を表すだけでなく、涙で目の前が暗くなる状態の表現にも用いられるものである。つまり、上三句は、辛さや悲しさといった、心理状態の現れである「涙」を、自然現象である「雨」で表現したものである。この涙の「雨」から「笠取山」を呼び起こすことで、先に説明した、恋の、「まどふ」と言う側面を「山」にたとえる表現へと繋げている。言い換えれば、「笠取山」は、上句の、ある心理の状態を示唆する、涙の雨の表現と、具体的な、恋にまどう心の象徴と考えられる、山にまどうと言う表現とを結合する機能を果たしているわけである。

このように、貫之のこの歌では、「笠取山」が重要な役割を果たしていると思われるのであるが、この、「笠取山」とはどういうものとして和歌に詠まれるものなのだろう。『古今和歌集』における「笠取山」の例を見てみよう。

雨ふれどつゆももらじをかさとりの山はいかでかもみぢそめけむ
（秋下　二六一）

あめふればかさとりやまのもみぢばはゆきかふ人のそでさへぞてる
（秋下　二六三）

これらの歌、ことに二首目の歌からは「笠取山」が、照り輝くまでに紅葉の美しい山であったことが窺われる。[注5]またこれら二首からもわかるように、紅葉は雨によって色づくものとして歌に詠まれるものである。そうすると、当面の貫之の歌の「笠取山」も紅葉の山のイメージで考えられている可能性は高いのではないか。

以上のように考えて、しかしながら、雨が降ることもまだ知らない、と言うのと、笠を取ると言うことは素直には結びつきがたい。[注6]実は、今この歌は正保版本の本文で示した（陽明文庫本も同じ）のだが、西本願寺本、御所本では少しく異なった本文となっている。

かきくもり雨ふるごとにみちしらぬ笠とり山にまどはるるかな

しばらくは、こちらの本文で考えてみることとしたい。

Ⅲ

そう考える時、貫之が恋の歌に、道を知らない紅葉の山を配したことで、そこに何を込めようとしたのかを説明出来なければならない。そのために、貫之の、道を知らない紅葉の山を詠んだ歌を見てようと思う。

紅葉〻のちりしく時は行かよふ跡だに見えぬ山路なりけり
（延喜十七年八月宣旨によりて[注7]）　（貫之集　八六）

この歌では、紅葉が散り敷いたために道の見えなくなったことが詠まれている。道を知らない紅葉の山に準ずるものと考えてよいだろう。落葉のために道が見えなくなるという趣向自体は、

ふみわけてさらにやとはむもみぢばのふりかくしてしみちとみながら
（古今和歌集　秋下　二八八　読人不知）

や、また紅葉と桜花の違いはあるものの、

しひて行く人をとどめむ桜花いづれを道と迷ふまでちれ

（古今和歌集　別　四〇三　読人不知）

など、『古今和歌集』読人不知の歌から見られることから、比較的はやくからあったものと考えられる。これらの歌の詠み方を踏まえたうえで、この貫之の歌では、見えなくなるものが「道」ではなく、「行かよふ跡」であることに注意したい。人間が行き通う跡さえも見えない、という表現は、そこが俗世間から隔絶した場所であることを示している。つまり、貫之の歌は、紅葉が盛んに散り敷く時の山路は、人間の営みの跡すら見えなくなり、あたり一面紅葉を敷き詰めた、俗世間とは別の世界の様に感じられる、ということを意味するのであろう。

また別の例を見てみよう

（延喜二年五月中宮の御屏風の和歌）

（九月きり山をこめたり）

（ちりぬべき山の紅葉を秋霧のやすくもみせず立かくすらん）

河のわたりにふねあるところ

山ぢにも人やまどはん川霧のたちこめぬさきにいざ渡りなん

（貫之集　一五六・一五七）

この屏風には秋霧の濃くかかった山を遠景に、川を舟で渡ろうとする人物が描かれていたのであろうか。ここでの「山路」は、一五六番歌から紅葉の山路であることがわかる。[注8] そこで道を失っているのである。さらに前歌を見るならば、その山路は霧に閉ざされ、他から隔絶された世界として描かれていることがわかる。そう理解した上で一五七番歌を読むならば、下句の「いざ渡りなん」という目的、方向性を持った人物の行動する姿を一層鮮やかに際立たせるため、上二句に、道もわからず、困惑の極みのうちにさまよい続ける人物のイメージを内包する、閉塞した世界としての山路を点じたのだと考えられるだろう。

以上の二例から、貫之の詠む、道を知らぬ紅葉の山とは、日常の生活空間とは隔絶した異空間であり、「紅葉」は、その空間の一種幻想的な性格を象徴する機能をはたしているのではないかと予想される。

もう一例を見てみよう。

もみぢのいたくちりたる山をこえたるところ

ひねもすにこえもやられず足引の山の紅葉をみつゝまどへば

（貫之集　二三七）

この歌では、「山を越えたるところ」という詞書に示された制約を越えて、「越えもやられず」と詠んでいる点に注目したい。先に予想した、道を知らぬ紅葉の山の詠みぶりが、貫之にとって一つのパターンとして確立していたことがここに現れているのではないだろうか。そう考えてよいならば、当初に示した「かきくらし」歌も次のように解釈できるだろう。すなわち、空がかきくもって雨が降るごとに――目の前が真っ暗になって涙が流れるごとに――（もみじがますます照りまさってきて、日常の世界とは隔絶しているがごとき）道を知らない笠取山に（出口もわからぬまま）迷われることですよ――心がまどってどうしようもなくなることですよ――。

Ⅳ

実は、この道を知らぬ紅葉の山の詠みぶりは、貫之にとって一つのパターンとして確立しており、また、特定の原拠を持っていたのではないか、と言うのが筆者の考えである。

その原拠としては、筆者は『万葉集』巻二「柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌」、ことに、次にあげる一首目の反歌第一首目を想定している。[注9]

秋山之　黄葉乎茂　迷流　妹乎将求　山道知知母（一云、路不知而）

（万葉集巻二[注10]　二〇八）

この歌では、紅葉の多い秋山は、亡くなった妻のいる、この世とは隔絶した別の世界として詠まれている。そして、紅葉のために道を失い、何処かへ迷い込んでしまった妻を求め、道も知らぬ山中をさまよう人の姿がある。ここで「まどひぬる」と表現されたのは、直接には「妹」であるけれども、残された男も山中をまどい、さまよっているとも考えられる。その姿をも、貫之は思い浮かべていたのではないだろうか。以下しばらく、貫之がこの泣血哀慟歌を、直接に『万葉集』によって目にしていたのではないかと言うことについて考えてみたい。

貫之の詠んだ

みちしらばつみにもゆかむすみのえの岸におふてふこひわすれぐさ

（古今和歌集　一一一一）

の初句「道知らば」という言葉は、『古今和歌集』に収められた凡河内躬恒の次の歌にも見られる。

みちしらばたづねもいなむもみぢばをぬさとたむけて秋はいにけり

（古今和歌集　秋　三一三）

「道知らば」という言葉は現存する平安朝の和歌にはほとんど見られないものである。[注11]その「道知らば」を貫之、躬恒の双方が初句に用いていること、更に、二句「つみにも行かむ」「たづねもいなむ」の類似からして、片桐洋一氏も御指摘のとおり、[注12]どちらか一方が他の一方を意識したものと思われる。躬恒の歌の、紅葉が散るのを、秋が紅葉を幣として手向けているのだ、とする発想は『古今和歌集』の歌にしばしば見られるもの[注13]である。

では、躬恒の歌の、紅葉を幣として手向け、去ってしまった秋、その秋の去っていった道を知っているならば尋ねてもいこう。という発想はどこから得たものであろうか。この一首に用いられた「道知る」「尋ぬ」「もみぢ」「秋」「去ぬ」という言葉からは、先程の泣血哀慟歌一首目の反歌一首目が想起されるのである。ここに描かれた情景――もみじがいっぱいなので秋の山へ迷い込んでしまった妻、もみじが散るようにあの世へ去ってしまった妻を求めたい。けれどもその道を知らないことよ――の「妹」を「秋」に置き換えるならば、躬恒の歌の発想をえることは比較的容易であろう。躬恒の歌は泣血哀慟歌によって想を得たものではないかと思う所以である。ならば、貫之の歌についても同様の状況が想定できないだろうか。貫之の歌も、今の躬恒の歌も『古今和歌集』に収められたものだから、詠作時期の近接している可能性が高い、そして、当然互いの歌を知っている。また、古今集撰進の準備のため双方とも『万葉集』を見たものと考えられる。[注14]また、貫之の歌と躬恒の歌のどちらか一方が、他方を意識したものであろう事は既に述べた。さらに、この歌に限らず、貫之と躬恒が同じ素材を互いに意識しながら詠んだと思われ

る例がしばしば見られることも既に指摘されている。[注15] 従って、ここでも貫之と躬恒が、『万葉集』によって知った泣血哀慟歌を互いに共通の素材として、歌を競い詠んだという可能性を認めてよいだろう。ならば、貫之の歌では、躬恒の歌ほどには、泣血哀慟歌の言葉と重なる表現が無くとも、貫之の歌の初句が、泣血哀慟歌から得られたものと考えることも強弁ではあるまい。

泣血哀慟歌において、知らない山路のどこかにある（はずの）ものは、この世を去ってしまった妻のいる、死者の世界、即ち、この世とは隔絶した別の世界である。人麻呂の歌の「山路知らずも」という言葉は、死者の世界、即ち愛しいもののいるところへ行くことの出来ない嘆きの深さを表している。この言葉は、それと同時に、知らぬ山路のその先に有るものが、この世とは隔絶した、別の世界であるという事自体をも表示している。つまり、そこへ通ずる道が、どうにも知られないものであると言うことは、その世界がこの世とは隔絶したものであることを意味しているのである。このことによって、紅葉の山と言う泣血哀慟歌の舞台が、日常の空間とは異なった空間としてイメージされ、一種幻想的な、紅葉で一杯の光景が目に浮かぶのである。

貫之は泣血哀慟歌から、道を知らない、という表現が今述べた効果をもたらし得るということを学んだのではないか。そうして学んだものを「忘れ草」という空想的な効能を持つ（として歌に詠まれる）植物の生える場としての住の江[注16]を提示することに用いたのではないか。このように予想するのである。

しかし、これをもって人麻呂の歌の「山路しらずも」から直接貫之の「道知らば」が出てきたものとするのは早計である。なぜならば、「道知らば」によく似た表現が他に見られるからである。例えば、

（十一年己卯夏六月大伴宿禰家持悲傷亡妾作歌…（四六二題詞））
出行道知末世波　妻乎・妹乎・待留　恋毛絶末思乎

（万葉集巻三　四六八）

この家持の挽歌の「出て行く」歌をも貫之は知っていたらしいことが、次の歌からうかがわれる。

出て行道としれゝどあふさかはかへらん時の名にこそありけれ

（貫之集　七五四）

この歌は、初二句の表現の類似[注17]、また「あふ坂」即ち「逢坂の関」と「妹をとどめむ関」との一致からして、家持の歌に依ったものと思われる。更に、

かねてより別ををしとしれりせばいでたたむとは思はざらまし

（貫之集　四三〇）

も上句の表現は家持の歌に依ったものではなかろうか。このことから、貫之の「道しらば」と言う詞も、直接にはこの家持の歌に依ったものと考える。

この家持の歌は、『万葉集注釋』の指摘のように、長歌（四六六番）の「あしひきの山路をさして入日なす隠りにしかば」という表現が泣血哀慟歌の「秋山のもみぢを繁み迷ひぬる妹」と内容的に重なることや、「入日なす隠りにしかば」ということばも泣血哀慟歌のものである。更に、家持の反歌一首目（四六七番）にある、「いゆ

く我妹かみどり子を置きて」も泣血哀慟歌長歌二首目にある「我妹子がかたみに置けるみどり子」に依ったものであろうことから、家持の挽歌は恐らくは泣血哀慟歌をも意識しながら詠まれたものと思われる。家持自身の意図はともかく、このことを『万葉集』を享受する側から見れば、家持の歌と人麻呂の歌は共に、愛する者を失った人間の、悲しみの姿を詠んだ歌として一つの共通したイメージのもとに鑑賞できるということなのである。したがって貫之からすれば、泣血哀慟歌を意識しながらも、家持の歌の表現を用いることが可能なのである。

さらに、『万葉集』には、これに類した、この世とは隔絶した別の世界を言うのに、「道を知らない」と表現した例が他にもいくつか見られる。

十市皇女薨時高市皇子尊御作歌三首

三諸之　神之神須疑　已具耳矣自得見監乍共　不寝夜叙多
神山之　山邊真蘇木綿　短木綿　如此耳故尓　長等思伎
山振之　立儀足　山清水　酌尓雖行　道之　白鳴

（万葉集巻二　一五六～一五八）

道を知らない、山吹の咲いている山の清水のある所とは、亡くなった十市皇女の居る、この世とは別の世界である。

また、巻十三の詠歌年代不明の歌にも似た表現が見られる。

……何所鹿　君之将座跡　天雲乃　行乃随尓　所射完乃　行文将
死跡　思友　道之不知者　独居而　君尓戀尓　哭耳思所泣

（万葉集巻十三　三三四四）

この歌は、死者の居る場所へ自分も行きたい、けれども道がわからないので、死者を思って泣くばかりだといっているのである。この歌も、先の高市皇子の挽歌と同じく、死者の世界を詠んだものである。

また戻って、次の人麻呂の歌では、死者の居る場所ははっきりしているけれども「道だにしらず」ということばが使われている。

讃岐狭岑嶋視石中死人柿本朝臣人麻呂作歌

……荒床　自伏君之　家知者　往而毛将告　妻知者　来毛問益乎
玉桙之　道大尓不知　鬱悒久　待加恋良武　愛伎妻等者

（万葉集巻二　二二〇）

この歌では、死者の居る場所としては狭岑嶋という現実の場所が提示されている。そして現に人麻呂は死者の居るところに来ている。したがって人麻呂にとって狭岑嶋は現実の世界である。けれども、死人の妻にとっては、愛しい者が死者となってそこに居る点、行こうにも道のわからない点から、日常の世界とは隔絶した、死者の世界として理解が出来る。

以上にあげた歌々などをも参考にしつつ貫之は「道知らば」と言う詞を得たのではないだろうか。何故ならば、前稿[注19]で述べたように、『万葉集』の挽歌を貫之が知っていて作歌に利用したらしい例が、他にも見られるから[注20]である。

Ⅵ

このように考えてくると、貫之の歌には泣血哀慟歌の表現を利用したのではないかと思われるものが、他にもあることに気付く。

わがこひはしらぬ山ぢにあらなくに迷ふこころそわびしかりける

（古今和歌集　恋　五九七）

この歌では、恋の心にまどっている様を言うのに、知らない山中を迷い、行く手もわからず途方にくれているという姿で以て喩えている。これは、泣血哀慟歌に描かれた、どうしようもないままに、愛しい妻の姿を求めて山中をさまよう人物のイメージと重なるものである。これをもう少し具体的に考えるための手掛かりとして、躬恒によく似た歌があるので比較してみよう。

わがこひはしらぬみちにもあらなくにまどひわたれどあふひともなし　（躬恒集[注21]　五八九）

『古今和歌集』秋部の「道しらば」歌からして躬恒も又、泣血哀慟歌を知っていたと考えて良いだろう。つまり、条件としては貫之とさして変わらないものと考える。また当面の二首についてもこれほどの類似は偶然とは思われず、どちらかが（先後関係はわからないが）意識しているものと考えられる。貫之の歌と比してまず目に付くのは、二句「知らぬ道」である。貫之が「知らぬ山路」と泣血哀慟歌の舞台そのままに詠んでいることとは、かなり異なった意味を持つと思う。躬恒は「まどう」ことの具体的な象徴を構成するものとして、知らない道、という言葉を泣血哀慟歌から、或いは貫之の歌をヒントにしながら得たのだろう。その時、泣血哀慟歌を構成する重要な要素の一つである「山路」を山とは限定しないただの「道」と変えたのである。[注22]更に、下句についても両者を比較してみる。貫之の歌では上句に恋に迷う心の比喩的な象徴として、泣血哀慟歌から得たのであろう「知らぬ山路」を配し、三句「あらなくに」という逆接の言葉で、下句「わびしかりける」という心情表現へと繋いでいる。この方法によって、恋に迷う心のわびしさ、という下句の一般的な心情が山中をまどう、という上句の象徴的な様態のために、切なさ、やるせなさ、絶望感等を伴って印象的なものになるのである。これに対して躬恒の歌では、上句で「私の恋は知らない道ではないけれど」と言っておいて、「ずっと迷いつづけている」とし、「けれども迷う人もない」と、論理上二度の屈折がある。この論理の展開の面白さが躬恒の歌の眼目なのであろう。上句は、知らない道をまどう人物のイメージを喚起するというよりも、「まどひわたる」という言葉を引き出すために有るのであって、二首を統括する「あふひともなし」に直接繋がるものではない。貫之の歌の上句が「わびしかりける」の象徴として機能しているのとは異なるものである。なお、貫之の「我が恋は」歌は『古今和歌集』本文としては大きな異文はないのだが、『貫之集』にはやや異なった幾種かの本文がある。

我恋は知らぬ山路にあらねども迷ふ心ぞわびしかりける[注23]　（正保版本）

我恋は知らぬ山路にあらなくに迷ふ心ぞまさる我身か　（定家筆切）[注24]

我恋は知らぬ山路にあらねどもなどたましひのまどひけぬべき　（陽明文庫本）[注25]

我恋は知らぬ山路にあらなくになどか心のまどひけぬべき　（西本願寺本、御所本）

これを見ると、「まどふ心――わびし」、の系統の本文に対立して、「まどひ消ぬべき」、系の本文の存することがわかる。「まどふ心――わびし」、系の本文は『古今和歌集』本文としてほぼ間違いなく認め

てよい。だから貫之自身の作品としてこの形があったことは間違いなかろう。問題は西本願寺本などに見られる、まどひ消ぬべき、の本文である。このような本文の変化が単なる誤写によって生じるとは考え難いし、家集のこの歌の前後にも誤りを誘うようなものは認められない。更に、まどひ消ぬべき、系の本文を持つ陽明文庫本、西本願寺本、御所本は必ずしも正保版本の下位に当たる性格のものではない。[注26] したがって、「まどひ消ぬ」の本文も、貫之自身の手になるものとの可能性が認められよう。そう考えるとどうなるのか。

「などか心の（などたましひの）まどひけぬべき」の本文からは、心が（或いは魂が）消えてしまう、ということで、死が連想される、それはまさしく泣血哀慟歌に描かれた死のイメージと重なるものである。もしかすると、この「消ぬ」という本文から受ける死の印象を嫌って貫之自身が改作したものが、決定稿として『古今和歌集』に入ったものだったかもしれない。それはともかく、この二種の本文が、上句はそのままに、下句の、心情の表現の方を変えていることには注意を払わなければならない。このことは、貫之が、「知らぬ山路」のイメージを変更することなく、そのイメージを統括する心情の方をあれこれと模索したということを意味している。つまり、彼がこの歌を詠んだ時には、貫之の内部にまず、泣血哀慟歌から得た「知らぬ山路」のイメージが確固たる物としてあり、そのイメージを様々な、個別の心情の表現と結び付けることによって、一首を構成するという方法を用いたのである。Ⅲ章で述べた、道を知らぬ紅葉の山の歌の詠みぶりが、貫之においては、一つのパターンとして確立していたと言うことも、その原因としては、今述べた作歌の方法を、彼が用いたことによるものと考えられよう。即ち、泣血哀慟歌から得た「道を知らぬ紅葉の山」のイメージを、様々な、個別の心情、あるいは、屏風の図柄と言う形で、詠むべきテーマとして与えられた、具体的な景物の表現と結び付けることによって、あれらの歌々を作り上げていたのだと考えるのである。

Ⅶ

ところで、泣血哀慟歌や、今まで見てきた、貫之が参考にしたと思われる『万葉集』の歌々は人の死を詠んだ歌である。そうした、いわば不吉な歌の表現を用いたものが、どうして恋の歌や、屏風歌という祝儀の歌として受け入れられたのだろうか。このことの起こる条件の一つとしては、泣血哀慟歌をはじめとする、『万葉集』の挽歌が、普通には知られないものだったのではないかということが考えられる。この考えを補強するものの一つとして、『人麿集』がある。『人麿集』には泣血哀慟歌一首目の反歌一首目と非常に類似した歌が見られる（他の反歌の内にも『人麿集』『拾遺和歌集』などに収められたものがある。しかし、これらの歌は「道、知らず」と言った表現を持たないのでとりあげない）ので、『私家集大成』によってその本文を示そう。

秋山の紅葉をしけみまとひぬるいもをもとむとこの日くらしつ
（人麿Ⅰ　四七）

秋山のもみちをしけみまとひぬるいもをもとむと山ちくらしつ
（人麿Ⅱ　二六六）

秋山のもみちをしけみまとふらんいもをもとめんやまはしらすも
（人麿Ⅲ　六二五）

これらの歌の結句に注目してみると、『万葉集』の本文とは全く異なった「くらしつ」と言う本文が優勢であることがわかる（「しらずも」の本文は Ⅲ類本の傍書に出てくるにすぎない）。このことは、「秋山の」歌は『万葉集』を離れて伝承されてはいたが、その過程で結句は「くらしつ」と形を変えていた、と言うことを意味しているのではないか。現存『人麿集』の本文が、いつの時代の形を伝えているのかは確定できないが、貫之の時代には『万葉集』そのものに依らない限り、「山路しらずも」と言う本文を持った泣血哀慟歌を知ることは出来なかった可能性が大きいと言うことを示しているのではないだろうか。

また、『万葉集』以外には、貫之以前の和歌に、泣血哀慟歌に詠まれたような、この世とは別の世界への道を知る、知らないと言った表現は、今のところ見うけられない。先に挙げた、『万葉集』の挽歌に付いても、その伝承歌と思われる歌は見出せない。もちろん、ただ単に現存する資料に見つけられないだけかもしれない。そこで別の方向から考えてみたい。

次の歌は、或いは、貫之の歌の影響を受けているかもしれない例である。

大輔がざうしに、あつただの朝臣の物へつかはしけるふみをもてたがへたりければつかはしける　　大輔

道しらぬ物ならなくにあしひきの山ふみ迷ふ人もありけり

（後撰和歌集　一二〇五）

この歌に対して敦忠の返した歌には、ある顕著な要素が現れる。

返し　　敦忠朝臣

しらがしの雪もきえにし葦引の山ぢを誰かふみ迷ふべき

（同　一二〇六）

この「白樫の雪」は、明らかに『万葉集』巻十の人麻呂歌集歌

足引の山道不知　白栲の枝母等乎尓　雪落者

（巻十　二三一五）

の表現に依ったものである。敦忠は、贈歌の「山ふみ迷ふ」という表現をそのまま自歌に取り込んだのであるが、彼にとって「山路、まどふ」と言う表現は、泣血哀慟歌ではなく、「足引きの」歌と結びつくものだったのだと考えられないだろうか。『貫之集』には敦忠の家の屏風歌も収められているし（四二四～四五五）、また、贈答歌（七七九・七八〇）も見えるから、敦忠と貫之の間には、相応に親密な関係があったものと思われる。したがって、敦忠が貫之の歌をよく知っており、大輔の歌を見て、貫之の、泣血哀慟歌をもとにしたと思われる。道を知らぬ山を詠んだ歌々を想起した可能性もあるのではないだろうか。その大輔の歌への返歌を詠むにあたって、敦忠は「足引きの」歌を選んでいるのである。

確かに、この「足引きの」歌は、平安時代にはポピュラーなものであったらしい[注27]。であるから、敦忠が泣血哀慟歌ではなく、この歌を利用することを思いつくこともっともである。しかし、それとともに、泣血哀慟歌が世に知られていなかったために、泣血哀慟歌の利用を思いつきえなかったと言う可能性をも示唆するものではないだろうか。

Ⅷ

以上のことから、貫之の時代の環境としては、泣血哀慟歌が世に

知られていなかったために、その表現を用いたところで不吉なものとは思われなかったのだと、私は考える。しかし、さらに大きな問題は、泣血哀慟歌を直接に『万葉集』から学んだと思われる貫之自身が、なぜこのような歌を詠み得たのかということである。

確かに、人の死を悼む歌も、恋の歌も人を恋しく思う点では共通しており、現に、同一の表現が挽歌にも、恋の歌にも用いられることがある。[注28] したがって、貫之が泣血哀慟歌をヒントにして恋の歌を詠もうと思いつくことは当然あり得る。また、ことに、泣血哀慟歌の、幻想的な、美しい紅葉のイメージをつくり出す表現は、屏風の歌を詠むに際して、好ましい表現の一つであるだろう（実際、貫之もそう判断したからこそ、泣血哀慟歌の表現を屏風の歌に用いたのだと考える）。問題は、それらの表現は、『万葉集』の泣血哀慟歌においては、妻の死と言う具体的なテーマと不即不離なものだということである。貫之がそれにもかかわらず、泣血哀慟歌の表現を用いたということは、泣血哀慟歌から妻の死と言う不吉な、具体的なテーマをひき剝がして、幻想的な、美しい紅葉の山と言う抽象的なイメージ、その表現のみを、摂取した事を意味するだろう。このことは、歌を詠む時に、具体的な状況や心情よりも、抽象的な美的イメージが優先される。そういう方法が用いられることを前提とするであろう。それが、Ⅵ章で述べた方法だったのである。

以上、貫之の歌と人麻呂の泣血哀慟歌の表現との関係を例にとって、貫之がそれを『万葉集』から直接に学んだこと、そこから、一つの、美的なイメージを得、それを具体的な状況に応じて一首に作り上げていたのではないかと言うことを述べてきた。

従来指摘されてきたように、貫之の歌の内には、似通った歌が多く見られる。[注29] その原因としては、貫之が多くの作品を残している屏風歌の場合、与えられたテーマ（屏風の絵）が類似していれば、詠まれる歌も似通ったものになる可能性が高い、と言った外的なものも考えられる。しかし、それだけではなく、今回述べてきたような、貫之の意図的な作歌方法の結果として捉え直すこともできるのではないだろうか。その具体的な様相に付いては、続稿を期したい。

注

1『貫之集』の本文は特に断らないかぎり『紀貫之全歌集総索引』（ひめまつの会編）所収の正保四年版歌仙家集本貫之集によった。ただし、濁点については私に訂正した所があるが、一々ことわることはしない。

2以下に引用する和歌の本文は特に断らないかぎり『新編国歌大観』によった。

3『狭衣物語』の本文は『日本古典文学大系』によった。

4『源氏物語』の本文は『源氏物語大成』によった。

5初句「かきくらし」の薄暗い色彩のイメージも、たとえば、

足引の山かきくらししぐるれど紅葉は猶ぞ照りまさりける（貫之集　二七）

のように紅葉の紅い色彩のイメージとの対比を暗に前提としているのではないだろうか。

6木村正中氏は笠取山を「『笠を取る』に掛け、笠を取るので雨に濡れないと詠んだ。」とされ、「笠取山の雨に、初心な恋のとまどいを象徴される。」と説明しておられるが（新潮日本古典集成『土佐

日記　貫之集』)、まだ知らないのは「雨降ること」であって、氏の解釈にもやや無理が有るのではないだろうか。

7 貫之集の配列から言って「延喜」は「延長」の誤りかとも思われるが、今は底本のままにしておく。

8 同じ屏風の例えば四月の所でも、

　四月おほみわのまつりのつかひ

いづれをかしるしと思はんみわの山見えとみゆるは杉にざりける

　むまにのりたる人おほくゆく

行がうへにはやくゆけ駒神垣の三室の山のやまかづらせん

のように連続した場面を詠んだ歌が見られる。ここでもそうとった方がよいだろう。

9 貫之が『万葉集』を見ていたのではないかと言うことについては、以前に述べたことがある。(拙稿「紀貫之にみられる万葉歌の利用について」　和歌文学研究　56号)

10 『万葉集』の本文は特に断らないかぎり『万葉集本文篇』(塙書房)によった。

11 管見に入る限りでは、ここにあげた躬恒の歌を除いて、その躬恒歌に依ったと思われる「道しらば尋ねにゆかむうぐひすはいづれの花をねぐらにかする」(和歌一字抄、橘為義)が見られる程度である。中世に入っても「道しらば我に教へよ夕ひばりやすくもあがる雲のうへかな」(新葉集　一〇四八　源頼武)など見られるにすぎない。

12 片桐洋一氏「古今集歌壇と歌語」(『論集古今和歌集』(和歌文学会編)所収)

13 竜田ひめたむくる神のあればこそ秋のこのはのぬきとちるらめ

　(古今和歌集　秋　二九八　兼覧王)

神なびの山をすぎ行く秋なればたつた河にぞぬさはたむくる

　(古今和歌集　秋　三〇〇　清原深養父)

14 『古今和歌集』は『万葉集』に入った歌は採らない方針であった(序によると)ならば、それを実行するためには当然『万葉集』を見たはずである。もっとも、現に『古今和歌集』に『万葉集』の歌と同歌と見なされる歌が在る点は疑問として残る。しかし、これに関しても理由は様々に考えられるのであり(例えば伊藤博氏「古今の万葉」(萬葉64号)など)、これを以て直ちに古今の選者達が『万葉集』を見ていなかったとはできない。なお、貫之の当時の『万葉集』が現在のものと同じであったという保証はない。しかし、現存する多数の伝本がほぼ同一の形態を示していることから、そう考えておいて大きく誤りであることはないだろう。また、そう考えたのでは全く説明がつかないといった現象も今のところ見られないので、一応、貫之の見たであろう『万葉集』と、我々の知る所のものと同じものであるとして考察を進める。

15 片桐洋一氏前掲書など。

16 住吉は『伊勢物語』百十七段の例を挙げるまでもなく、古来、神の居ます神聖な地としての理解があった。したがって住吉という地は、一種の他界として描かれることをも許容するものだったと考えられる。

17 平安朝の和歌では「出てゆく人」(古今和歌六帖二〇五四、猿丸

集（私家集大成、第Ⅱ類本）一八）、「出てゆく君」（伊勢物語四七段。古今和歌六帖、業平集にも同歌あり）の例はあっても「出てゆく道」の例は見られないようである。

18三・四句定訓なし。

19注9に同じ。

20例えば、人麻呂の日並挽歌（巻二　一六七）、憶良の古日を恋ふる歌（巻五　九〇四）に付いては、前稿で述べた。さらに、先程挙げたものの内の高市皇子の山吹の花を詠んだ挽歌、これについても貫之が作歌に利用したらしい。

いそのかみふるの、道の草わけてし水くみには又もかへらん

（貫之集　恋　五七八）

この歌では、草深い、人も訪れない様な道をわけて清水を汲みに行くことを、恋の象徴としている。これは高市歌の、亡き皇女の居る所を山清水の湧く所とする発想によっているのではないだろうか。清水の有るところに、恋しい人の姿が有るのである。高市歌の、皇女を訪ねようにも道のわからない絶望感は、貫之歌においては「一抹のアンニュイ」（大岡信氏『紀貫之』二一四頁）となって生かされているものと思われる。更に、この高市歌の一首目「三諸の三輪の神杉」に気をつけてみよう。「神杉」を詠んだ歌は他に『万葉集』には二例見られる。

石上　振乃神杉　神備西　吾八更々　戀尓相尓家留

（万葉集巻十　一九二七）

石上　振神杉　神成　戀我　更為鴨

（万葉集巻十一　二四一七）

なお、巻十の歌については『古今和歌六帖』（四二七九）にも三句「かみさびて」の形で収められている。

これらの歌の「石上ふる」という地名と、年を経てまたしても恋をするという発想は、貫之歌のものと全く同じものである。つまり、貫之は高市歌から「石上」歌を想起し、両者を一つにして『貫之集』五七八番歌を詠んだのではないかと思うのである。

21『躬恒集』の本文は『校本凡河内躬恒全歌集と総索引』により、私に濁点を付した。

22なお、『古今和歌六帖』に、貫之、躬恒の両方に類似した歌「こひてへばしらぬみちにもあらなくにあやしくまどふわがこころかな」（一九八七）が見られる。これは貫之、躬恒のどちらかの歌に依ったものと考えられるが、あるいはそれ以前にあったものかも知れない。この歌を直接のヒントにして、貫之の「我が恋は」歌が詠まれた可能性もある。しかし、そうであっても「恋てへば」歌には見えない要素「山路」を加えている点、即ち泣血哀慟歌の舞台を自詠に持ち込もうとする貫之の執着をそこに見るべきだろうし、そうはしない躬恒の対照的な姿勢を読み取るべきだろう。

23初、二句には適宜漢字を宛てる。

24日本古典全書『土佐日記』所収『紀貫之全歌集』による。

25『校訂貫之集』による。

26島田良二氏『平安前期私家集の研究』他

27この歌は、『古今和歌六帖』『人麿呂』『拾遺和歌集』『枕草子』他、多くの歌集、歌集等に収められている。なお、貫之自身もこの歌を知っていたようである。「むめの花おりしまがへば足引きの山路

の雪のおもほゆるかな」（貫之集一二六）

28例えば、『日本古典文学全集　萬葉集三』に指摘された例だが、万葉集巻一三・三二七四〔相聞〕と巻一三・三三一九〔挽歌〕など。

29その実例は、菊地靖彦氏『古今集以後の貫之』に多く収められている。

国語国文学研究室受贈図書目録(一)

（一九八八年八月～一九八九年六月）

○単行本

国文学年鑑　昭和62年（至文堂）　国文学研究資料館

京都大学蔵大惣本目録　第二分冊　京都大学附属図書館

長与善郎（評伝・人と作品）岩淵兵七郎著　同書刊行委員会

財団法人新村出記念財団報2　同財団

『会館芸術』細目（第九巻・昭和十五年）米田義一著　同氏

奈良県の言語（奈良県史13）鏡味明克著　同氏

近松をめぐる流れ　湯川春洋著　同氏

太平記の説話文学的研究　谷垣伊太雄著　同氏

『翰林学士集』二種　影印と翻刻　蔵中進著　同氏

国文学研究資料館共同研究報告5

逸翁美術館蔵国文学関係資料解題　国文学研究資料館

国際日本文学研究集会会議録（第十二回）　国文学研究資料館

基礎日本語活用辞典　インドネシア語版　国立国語研究所

図書寮叢刊　伏見宮旧蔵楽書集成一　宮内庁書陵部

○定期刊行物

愛知淑徳大学国語国文　第12号

愛知淑徳短期大学研究紀要　第27・28号

愛文（愛媛大学法文学部国語国文学研究会）第24号

青山語文　第19号

青須我原（帝塚山短期大学）　第35～37号

旭川国文（北海道教育大学旭川分校）　第5号